
彼女戦線異状なし

五朗八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女戦線異状なし

【Nコード】

N1447BA

【作者名】

五朗八

【あらすじ】

2025年。人類は突如として現れた人間の天敵生物「ハンター」
。人は彼らとの存亡を賭けた戦いに敗れ、その大半を駆逐され、滅亡に瀕していた。そんな状況の中、わずかながらに抵抗を続けるEU軍の美人士官であるアクリエル技術少佐（ちなみに人妻）は、人類の反撃用兵器である「アルティメットブレイズ」を輸送中に不思議な能力を持つ少年「高杉紳作」に出会う。
この物語は滅びゆく人間の時代に生きる少年とそれを取り囲むヒロイン（複数）との愛と勇気のサバイバル物語。

襲撃？（前書き）

登場人物

アクリエール・ラ・ノインバステン・プランタジネット

19歳で超絶美人で貴族令嬢で人妻で技術少佐というありえねえヒロイン。

アンリ・ジャービス

15歳でアクリエールに使える執事の少年 アクリエールに忠実な家事完璧な美少年

レイノルズ中尉

美しい上官と秘密兵器を輸送中の若き小隊長

襲撃？

北へ、北へ・・・軍用ジープに先導された1台の大型トレーラーが夕暮れの道をひた走る。普通なら仕事から帰る車や物資を運ぶトラックが往来してもおかしくないこのEUの大動脈たる国道だが、今は一台も車は見当たらない。

先行するジープには、ブルーのヘルメットに防弾ジャケットに身を包んだ男たちは、EU軍所属の兵士たち。運転する若い兵士はもとより、助手席に座る将官も後部座席のベテランの兵士もグツと前を凝視している。猛スピードのため、すさまじい風切音で肉声は聞き取れないが、かぶっているヘルメットにヘッドフォン機能がついているため、お互いにコミュニケーションは可能な状態ではある。だが、誰一人話さない。

彼らの任務は後方のトレーラーに積まれた荷物と一人のVIPの護衛。このお荷物を200キロ離れた地点まで行くのだ。そうすれば、また比較的安全な地下にもぐりこめる。

（奴らに見つかったら・・・。）

ジープの助手席で指揮をとるレイノルズ中尉は思わずつぶやいた。その声は車の風切音にかき消され、音にはならなかったが、そう、奴らに見つかったら「終わり」である。手に持った銃器は「奴ら」には効果がない。これは同族（人間）に対するものだ。同じ人間が略奪のために襲い掛かってくるの可能性がある。だが、奴らに比べれば脅威ではない。少なくとも同族は武器で排除できるからだ。

前方にうつすらと赤い光の点滅を発見した。どうやら中継地点だ。

任務は予定どおり遂行されている。ここで燃料を補給し、食料を補給するのだ。そうすれば、あと2時間と少してこの危険な任務は終わる。

国道沿いのうらぶれたガソリンスタンドにジープが停車する。すぐさま、2人の兵士が降りる。辺りを警戒しながらトレーラーの停止を待った。スタンドの建物から先ほどまで光っていた赤いライトを手にした小太りの小男が近寄ってきた。

「レイノルズ中尉でありますか。」

「ああ、そうだ。」

助手席の将官・レイノルズと呼ばれたE.U.軍中尉は年の程20代後半であるのか・、くすんだ金色の短髪にがっしりとした長身だが、戦場の場数を踏んでいないせいか、少々、声を上ずらせて応えた。

「エージェント108です。予定どおりですな。昨日からここに張ってますが、大丈夫です。この周辺には奴らはいませんぜ・・・」

小男の方はずいぶん年上だが、階級の上の青年にへりくだったような口調で話しかけてきた。若い中尉は奴らがいないと断言するその男に少々いらだった・・・（どこにそんな保障があるのだ・・・）心の声が声になった。

「なぜ、そんなことが分かる・・・」

「いや・・・臭いですわ・・・臭いで分かるのですよ。中尉殿」

「臭い・・・そうなのか？」

根拠のなさそうな小男の答えだったが、信じたい一心の中尉にとっては、信じたい言葉であった。実際、この若い中尉も「奴ら」とは相對していない。奴らに襲われた現場なら何度も遭遇したが、あの地獄のような光景から察するに、もし、出会っていれば自分はこの世にはいないだろう。

「匂いといえば・・・この匂い・・・VIPはいい女ですな・・・」

エージェントが見つめる先にその人物が現れようとしていた。

トレーラーから降りてきた兵士に混じって、この男だらけの光景にそこだけが輝いているかのような・・・白いタイツに包まれたすらりとした長い足に白いブーツ、黒の高級将校用軍服にEU軍の記章を付けたベレー帽をちょこんとかぶったうら若い女性が地面に降り立ったところである。

エージェント108は、少々、嫌らしい目でその女性の足先から頭のとっぺんまで見ると、急に真顔になった。

「あれは、技術少佐の階級章ですな。年増の色っぺえ姉ちゃんかと思いきや、まだ小娘じゃないですか。」

上官に対しての無礼な台詞ではあったが、階級と似合わない今回のVIPに対してレイノルズもつい、知り得ている情報を話してしまった。

「アクリエールEU軍技術少佐・・・元はイギリスの貴族のお姫様らしい。年は19歳。今はプラントジネット・・・なんとかの奥方だそうだ。」

「19歳で人妻ですかい。これはこれは・・・旦那はロリコンですな。」

はは・・・つい小笑してしまったレイノルズであったが、かれ自身26歳。19歳で結婚したという年下の上官を初めて見たとき、あまりの可憐さと美しさに我を失い、敬礼するのを忘れてしまった思い出があつた。後で彼女がバイオ技術とロボット工学で博士号を持つ天才少女で、しかもEU軍少佐・・・イギリス貴族のお姫様にて、プランタジネット公国大公夫人と聞いて、そのありえない肩書きに面食らつたものだ。

当の美しい少佐は、透けるような見事な金髪の長い髪をベレー帽からゆらし、細身の体に不似合いな豊かなバストと引き締まつた腰、そして絶妙なバランスの細い足を惜しげもなく女性将校用のスカートから出して軽やかに近づいてくる。少しだけつり上がった目は気の強さを感じさせるが、パツチリとした大きな目に輝く青い瞳。形のよい鼻にピンクの唇は男性誌のグラビアに登場させても不思議でない美貌だ。それでいてエロチックな感じがしないのは全身からでる清純なオーラなのか、IQ200は超えると噂される頭脳への先入観なのか・・・。後ろに従卒の少年を従えて、美しい少佐は指示をきばきと下す。

「アンリ・・・みなさんに熱いコーヒーを配りなさい。それから、トレーラーの荷物の確認。」

あつ、レイノルズ中尉。ここの滞在時間は・・・。」

「はつ。25分の予定です。兵士4名が定位置につき警戒中。燃料補給を終わり次第、出発します。」

「中尉・・・兵士にPB型装備をさせた方がよくないでしょうか。」

アクリエールはレイノルズに同意を求めた。その瞳は薄暗くなつて見えにくくなつた道路の先を見つめている。

（なんだか、嫌な予感がする。）

アクリエールは不安を振り払うように語気を強めた。

「P B型装備をさせましょう。」

「P B型ですか・・・。」

レイノルズは考えた。「奴ら」用のP B型装備。今、展開している20mm機関砲と兵士が個々に持っているアサルトライフル、マシンピストル・・・といった装備から、「奴ら」用に特化した武器に持ち変えるのだ。だが、これらの武器は「奴ら」に効果があるとはいえ、火力的にはかなり劣る。「奴ら」よりも同族の人間の方が脅威な場合もある。「奴ら」の目から逃れ、隠れるように暮らしている人間は生きていくために食料を奪い合う。「奴ら」に見つからないように暮らすには食糧生産などでできず、過去の遺産である保存食料の奪い合いで生き抜くしかない。「奴ら」に狩られるよりも同族である人間の襲撃で命を落とす確率の方が高い。それにP B型装備いえども、奴らに効果がある保障はない。通常兵器の火力で押し切り、「奴ら」を退散させたという話も聞く。

「少佐・・・すでに兵士の配置も済んでいます。大丈夫です。このまま、待機しましょう。」

「そうですね・・・。現場指揮官は中尉ですからその決定に従います。」

通常、少佐というレイノルズから見れば階級が上の将校なら、自分の意見を押し通すものだが、アクリエールは自分の立場をわきまえていた。自分の役割はトレーラーの荷物を運ぶこと。護衛部隊の指揮官は中尉であって自分ではないこと。そして、戦場では経験の差がものをいうこと。戦いも経験がほとんどなく、他の軍人から見れば19歳の小娘に過ぎない自分が「命令」を押し通すことのデメリットを考慮したのだ。

襲撃？（前書き）

登場人物

アクリエール・ラ・ノインバステン・プランタジネット

19歳で超絶美人で貴族令嬢で人妻で技術少佐というありえねえヒロイン。

アンリ・ジャービス

15歳でアクリエールに使える執事の少年 アクリエールに忠実な家事完璧な美少年

レイノルズ中尉

美しい上官と秘密兵器を輸送中の若き小隊長

襲撃？

「お嬢様、ティーをお持ちしました。」

従卒のアンリがポットから注いだお湯で紅茶を入れ、年代物のおしやれなティーカップを差し出した。彼は実家であるノインバステン家から一緒にしてきた執事の少年。年は15歳。灰色の髪を後ろで束ね、まだ成長途中ながらなかなかの美少年である。背はアクリエールよりも低いから、遠くから見れば姉と弟のようにも見える。だが、先祖代々ノインバステン家に仕えてきたこともあり、絶対服従の忠誠心は遣伝子レベルで染み付いている。アクリエールがプラントジネット家に嫁いでも彼女専用執事として、それこそ朝から晩まで付き従っているのである。軍ではアクリエール付きの従卒で上等兵待遇である。

兵士たちには紙コップでインスタントコーヒーを配ったアンリは、崇拜するお嬢様には、とびっきりの紅茶葉をティーポットで入れる。戦場だから、ミルクやレモンといったものは用意できなかったが、香りの良い紅茶は中国から来たというキーマンティー。渋みの少ない糖蜜のような甘さが味わえる高級茶葉から抽出される味は、プラントジネット公爵夫人にふさわしい飲み物だ。

アクリエールが一口口をつけるとタイミングを計らって、アンリが一丁のハンドガンを手渡す。

「お嬢様。PB装備。お嬢様だけでもお持ちになつては。」

慣れた手つきでマガジンをはずす。弾倉から覗く青色の弾頭は、PB装備の証。フルオートマチックで15発発射できる。それに予備

マガジンを一つ、大切なお嬢様に手渡した。

アンリ自身、肩にPB装備の主戦武器である携帯ハンドランチャーをかけている。この武器は「奴ら」に対して人類がささやかな抵抗を行うために開発されたものであるが、効果の程は未知数である。両武器とも当たれば効果があるが、高速移動してくる「奴ら」に当たる保証はない。なにしろ、マシンガンで武装した兵士3人が猛射撃したところで、その雨のような弾丸をかくぐり、一撃で兵士たちをなぎ払うのである。

「アンリ……ごめんなさいね。こんな危険なところに付き合わせてしまつて。」

飲み干したティーカップを戻し、アクリエールはアンリに優しいまなざしを向けた。

「いえ、お嬢様。仕方ありません。あれの開発はお嬢様にしかできませんし、この度、完成したことで人類に光が見えてきたのです。量産されて実戦配備されれば、もうお嬢様がこんな危険を冒すことはないでしょう。あと1日。合流ポイントまでいけば、安全です。」

「そうね。」

ここから100キロほどの合流点。やつらの勢力範囲からはずれたところで、大型ヘリに移る。それで2時間も飛ばせば、目的地……人類の組織的反撃の拠点。EU軍旗艦超大型空母「ジャンヌダルク」である。

エージェント108と呼ばれている男は、自分が特別な嗅覚を持っていると確信していた。

特に奴ら…（人間はこの種の生物にハンターと命名していたが）…その臭いは、ハンターが接近し、危険なエリアまで進入する前に捉えることができた。そのおかげで、この仕事を長く続けていると自負している。多くの仲間はハンターに襲われ命を落としているが、自分だけは事前に臭いを察知し幾度となく何を逃れてきた。

だが、この夜は彼の嗅覚は役に立たなかった。というより、危険な臭いを感じた時には絶望を感じたからである。突然の強烈な臭いは、逃げる時間を与えない近距離であることを示していた。

（なぜだ！今までこんなことは一度たりともなかった…。）

無駄と分かりながらもエージェントは廃墟の建物の机の下に身をかがめた。ハンターの嗅覚からすれば、どこに隠れても無駄であることは、同じく人並みはずれた嗅覚で生き延びてきた彼にとっては皮肉ではあったが…。

襲撃？（前書き）

登場人物

アクリエール・ラ・ノインバステン・プランタジネット

19歳で超絶美人で貴族令嬢で人妻で技術少佐というありえねえヒロイン。

アンリ・ジャービス

15歳でアクリエールに使える執事の少年 アクリエールに忠実な家事完璧な美少年

レイノルズ中尉

美しい上官と秘密兵器を輸送中の若き小隊長

襲撃？

少年が持ってきたコーヒーをすすり、薄暗くなった空間を食い入るように見つめる。ラルゴ上等兵は20m機関砲を構え、発射ボタンに指を置いている。いざとなったら、毎分4000発の弾丸を打ち出す。この破壊力に生身の生物なら何一つ生き残れないはずである。

だが・・・

「な・・・なんだ！」

光が見えた。二つの赤い光。ゆらり、ゆらりと揺れながら明らかに前進してきている。

「間違いない・・・奴らだ！」

ラルゴ上等兵の指が発射ボタンを押す。すさまじい発射音と同時に叫ぶ。

「緊急事態・・・奴らです」

すさまじい弾丸を潜り抜け・・・いや・・・何発かは確実にヒットしているはず。だが、ヒューマンハンターである「奴ら」は特殊な障壁をはりめぐらし、物理的な攻撃はほとんど弾き飛ばす。それでもその障壁を突き抜けていくばくかの弾が突き刺さっていく。しかし、その程度の衝撃はたちまち、超高速再生で傷がふさがる。前進を止めることはない。

レイノルズ中尉の耳に上等兵の断末魔の声が届いた。

「3時の方向、集中砲火・・・打て」

小隊長の命令で部隊は一斉に古ぼけたガソリンスタンドを囲むように配置した仮設陣地から20mm機関砲を叩き込む。

「少佐・・・中に」

レイノルズ中尉は、アクリエールに向かって叫ぶ。その美しい上官と御付きの執事の少年が建物に入ったことを確認した若き中尉にさるなる複数の断末魔の声が・・・そして銃撃音が止んだ。4機の機関砲仮設陣地が沈黙した事実・・・そう「奴ら」1匹ではない。レイノルズが腰のハンドガンに手を掛けたとき・・・大きな影が正面に立っているのに気づいた。ヒグマほどの巨体。通常4つ足で移動するそれは、攻撃時に後ろ足で立ち上がり、強烈な前足による攻撃を行う。さらに上あごから突き出た2本の牙で噛み付く。胴体は熊に近いが、皮膚は爬虫類の鱗のようであり、顔には毒々しい角が2本生え、赤い目がぎらりと光る。

レイノルズは夢中でハンドガンを連射する。だが、至近距離の銃撃も奴ら・・・正式名称として人間は「ハンター」と命名していたが・・・その特殊な障壁（人類はHシールドと名づけた。）にはじかれる。冷たい汗が頬を伝う・・・

「終わった・・・」

一言つぶやき、レイノルズは目を閉じた。一撃の痛みとともに恐怖を感じなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1447ba/>

彼女戦線異状なし

2012年1月5日21時47分発行